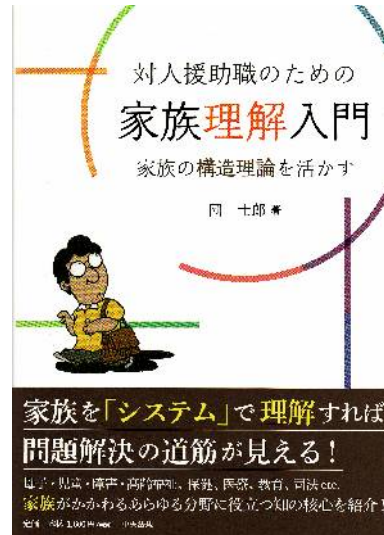


続・家族理解入門

家族の構造理解・応用編

団 士郎

仕事場D・A・N／立命館大学大学院



三刷発売中

ぼつぼつ始めなければと思っていたことを開始する。「家族理解入門～家族の構造理論を活かす～」(中央法規出版)の続編である。

一冊目(上の表紙)では実際の家族を提示して、どこに構造的特徴が見られるかを解説した。「構造理論」のキーワード理解のために家族に登場して貰った。

今回の意図としては、様々な家族に登場してもらい、その課題解決に向かうにあたって、焦点になる(なった)と思われる家族の構造的特徴を見いだしながら、取り組みをプランする。そして関わったケースに関しては、実際にやってみた結果も記述する。

当然のことだが、『その後、家族には何も起きませんでしたとさ・・・』等という、おとぎ話はない。何かが片付けば、又次の何かがやってくるのは人生の必然である。ただその時、初めての時よりも不安が小さく、自分たちで何とかできるかもしれないと希望が持てるようになっていたら、その前に起きた問題は困っただけの事ではなくなる。

近年、日本の家族は「もし、なにかあったら・・・」と思い過ぎる余り、保険にエネルギーを使い果たしているように思う。人生は長い。家族で居る時間には様々なことが待ち受けている。それを否定する必要も、恐れる必要もない。さて我が家には、何が待っているのかな?と、ドラマを楽しむように自身の暮らしを楽しめばよい。

家族は千差万別で、同じケースなど一つもない。だから処方箋もみんな異なっていて当然である。だが一方で、家族は時代(社会システム)と構成(家族システム)によって、かなり似通っているとも言える。そこが家族の面白いところでもあり、生活のヤレヤレ(懲りないで繰り返す)なところでもある。だから、楽しんだ者勝ちだと思って暮らせばいい。

★「続」と銘打ってはいますが、一冊の本として原稿が完成しているわけではなく、むしろ二冊目に向けた

素材として、手持ちの過去に既発表のものと、今考えていることを混ぜ合わせての記述を続けます。

【書き下ろし以外の初出誌は、季刊「そだちと援助」(明石書店)、家族療法学会誌連載(金剛出版)】

構造理論で読み解く現代家族

症状、問題、事件、障害、疾病…等、こういうキーワードで専門分野のことを語る人はたくさんいる。

しかし、人が暮らす世の中で起きている多くのことは、細分化された専門領域毎の出来事ではない。大半は、最先端のハイテク対応事象ではなく、これまでも繰り返されてきた、ローテク現象である。更に問題(疾病や事件)が起きている場所に、複合的問題(貧困や無知など)が存在することも少なくない。その一方で、なぜこんな事ぐらいで大騒ぎするのか…と思うようなことも、世の中にはたくさんある。

家族の問題は診断名や分類名の付いた症状より、それを扱う人々の関係の中で起きていることが多い。だから私達は今、専門細分化しないところで、家族のことを考える必然に向き合わされている。

そうしないと、専門家ばかりが揃ったと思っている世界で、誰にもどうにも出来ない複合問題を抱えた家族の今を生きなければならないことになる。

ここで扱いたいのは、どちらかと言えば大問題より小問題。ささやかそうでやっかいな問題を、どう解決するのか。そこに道筋はあるのかということを中心に考えたい。

これは都市の治安問題を考える時、しばしば話題になることに似ているように思う。専門家が大事件ばかりを追いかけている都市の治安は、けっして良くならない。落書きや、痴漢などの軽犯罪を、丁寧に対応してゆく活動が、街の治安向上に繋がる。

みんなが大好きなコンビニ刑事や、名探偵が大活躍する街は、けっして良い社会とは言えない。

ケース

藍子さんは三十代前半の公務員。大学卒業後、いったん民間企業に就職したが、やはり元々やりたかった専門技術を活かして働きたいと転職した。年齢を考え、結婚もしたいと思っているが、なかなか交際が長続きしないと語る。年子の妹は、実家で両親と暮らす同業の資格専門職だそうだ。

彼女の訴えは、男性との関係が上手くいかな

いのは、両親の夫婦関係を見て育ったせいだと思うようになっていることだった。

藍子さんが小学校時代、父には母へのDVがあった。子どもに手を挙げることはなかったが、母はかなり酷い暴力を受けていて、肋骨が折れたこともあった。事が起けると、妹は怖くて自室に逃げ込んでしまっていたが、自分は止めなければと思って随分苦しい思いをした。

近年それを思い出すと押さえられなくなり、最近も実家に帰った時、母になぜあの時離婚しなかったのかと問い詰めた。すると母は今でも離婚したいと言った。

それならと藍子さんは母親と一緒に、マンションを探しに不動産屋に出かけた。手頃な物件が見つかり、手付けも打って帰宅し、妹にこの話をしたところ、妹は「私はここに残る」と言ったという。

読者への質問

藍子さんはこの先、どうするつもりなのだろう。一人暮らしの現状を引き払って、母と同居するのだろうか？妹の返事をどう聞いて、今後どう扱うのだろう。

あなたならこの話を聞いて、どこからどのように手をつけるだろう。少し考えてみてから、先に進んで貰いたい。

彼女の心の中には様々な葛藤や言葉が溢れていたに違いない。しかし多くは独り言である。彼女は妹とも、父親とも、今回の件について何も話しあっていない。

訴えに急性の症状はない。藍子さんの思いもまったく理解しないわけではないが、診断・分類名を付けて処遇するようなものではない。

だが、この問題を家族の構造的視点からとらえて整理すると、とても特徴的なことが見える。

一つ目は親世代の夫婦問題に子ども(藍子さん)が口を挟んでいる世代間境界の侵犯である。理由がどうあろうと、子どもが両親夫婦の婚姻関係の今後に影響力など持つべきではない。

そんなところに拘り続けること(かかわり続けさせられること)自体不健全である。夫婦の三

組に一组は離婚をする時代に入っている。カップルのトラブルもますます増加することだろう。その一つ一つに子どもや親族が巻き込まれていると、紛争ばかり増大する。

そんな時には、誰が直面すべき課題なのかの原点に戻って考えることが大切だ。子どもや上世代が夫婦問題に参入するのは、しばしば問題を更に紛糾させるだけである。

二つ目は、同胞サブシステムの一員である妹に、家探しの経過は何も話さず、結果だけを伝えて断られている件である。これは「姉妹サブシステム」の形成し損ないの結果だと考えられる。

ここまでの生育史に事情はあったのだろうが、姉妹はコミュニケーションが上手くとれていない。姉妹のこれからの人生を考えると、不確定要素は一杯だが、「同胞サブシステム」の修復は、今の問題と関わりなく大切になってくる。

両親の加齢が進み、病に倒れたり、寝たきりになったりした時のことを考えてみよう。彼女たちの人生がどう変化しているかは予測できないが、その時、姉妹で向き合って話し合うことが出来なければ、その後の関係は決定的に壊れるだろう。

現在、藍子さんは父親も受け入れることができていないようである。だから母親だけを救い出し、父親は放棄するような提案をしてしまったのだろう。

構造的視点で考えると、今回の問題をきっかけに、姉妹サブシステムの再構築を図っていくのが、家族の今後にメリットが大きい。

そこで藍子さんに、妹と一度話し合う機会を持つ努力を、次回面接までにしてくるよう勧めてみた。



次の面接の冒頭、彼女が嬉しそうにこんな報告をした。

「前回のお話の後、すぐやってみました。妹に電話して、一度二人で会いたいと言うと、意

外なことに妹は快諾しました。そしてその週末に会ったのですが、嬉しい驚きの連続でした。」

「妹は大人になっていました。私よりしっかりしてるかも……」

以前、藍子さんが話していた、「妹は私と二人になると、ほとんど何も話さない」という彼女ではなかった。よく考え、行動を決める大人になっていたと思ったという。

「いつまでも妹だと思っていた私の方が、彼女のことが見えていなかった……」と語った。

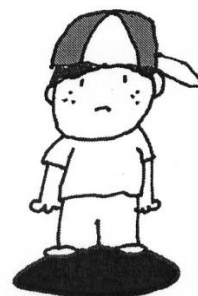
構造再編

藍子さんの訴えのような問題を、今だけの事にして論じても、過去の傷つきだと定義して論じても、得られるものは多くない。ドライなことを言えば、両親はそのうち亡くなる。一緒にという事はないから、どちらかが残る。その後の一家の暮らしは否応なくリセットされなければならない。

その時に、姉妹が話し合うことが出来ない関係だったら、やっかいなことになるのは当然だ。何もなくはいられないことが分かったら、何かあった時の対策を協議できる関係に自分たちを整えておくのが、未来を見据えた賢明さというものである。

五年余り関わった家庭裁判所の調停委員時代、最悪の状況で財産分与の話をしなければならない人達と会った。当然、事態は紛糾し、決着後も二度と交流しない兄弟姉妹になっていった。あそこには明らかに、親世代にも子世代にも、家族の構造の持つ一般性への知恵が足りなかった。

家族の境界と社会



子どもの頃、私は自分の暮らししている場所の他に、どこかに居場所があるなんて考えられなかった

たまに、悔しいことや悲しいことがあると、家出したくなったりはしたが、行き場所を想像することはできなかった



気楽な人たちが言う



内と外

家族には内外の境界というものがあって、これが各家庭においてどのように形成されているかは興味深い。

昨今のプライバシー感覚からすると、一般的には閉ざし気味、防衛的であるのが通常感覚だろう。戸締まりもせず、近隣の住民が、気の向くままにズカズカ立ち入ってくるような昭和30年代の日本家族は今では想像しにくい。

昼間、家族は出払っていて、施錠の留守宅というのが一つのパターンである。こういう家の子達が増えてきた時期に、「鍵っ子」なる言葉が流行した。

かつて、少しゆとりのある都市部の一家では、知人の子を居候させたり、親戚の子を預かったりすることもあった。

日本の家庭のオープン度合いは、核家族化、都市生活化に伴った家屋の手狭さや共働きによって、急速に低くなったのだろう。それは善し悪しの問題ではなく、これが平均的で今日的な日本の家族の内外感覚ということである。少し融通しあうような他家族との相互浸透性は弱くなる一方の今だといえよう。

もったもそれには大した不幸もなかったせいかもしれない



児童虐待が話題になって、児童相談所の対応が甘いとかが、そんな話が世の中をにぎわす



境界設定

だからかも知れないが、対人援助場面において、この内外境界感覚に違和感を覚える人達と出会うことが少なくない。思わず、「内外のけじめはないの?」とか、「他人と身内の区別

はすれば！」と思わされる事態に遭遇する。

家庭事情にやたらに他人が関わってきていたり、金銭管理や所有感のズレが目につく暮らしなどである。

子どもの生活に目を向けてみると、圧倒的多数の子は夜になると家に帰る。かくも多様に家族はあり得るものか・・・と絶句するような事情を抱えた家もあるが、そこにも子どもは帰る。他に行き場がないからだという人もある。無論、そういう側面もないことはない。しかし他に行くところがあつたら自宅には戻らないかといえはそうでもない。家出している子も結局、家に帰る。いろいろあるだろうが、圧倒的多数の子ども達は家を捨てない。

日本社会の子育てテーマが、自宅から離れない子どもと離せない親問題になって久しい。

今まで持続されてきた内の世界と、“こっちの水は甘いぞ”と誘う外の世界。思春期になると、日々どちらを選ぶか、悩ましいのが当然であつた。むろん、実績は圧倒的に内の世界にある。

にもかかわらず、魅力と誘惑に溢れた世界が外だつた。海外留学や世界一周は簡単には叶わない夢だつたからこそ誘引力が強かつた。それに青年期の原則、「遠くない時期の家族からの分離独立」があつた。

このメカニズムの中で、子ども達は皆、自立していった。時期は個別的で、各家庭事情が重なっていた。

ところが現在、被虐待などの厳しい家族状況下の子には、早期の分離を促す。そして、中流小市民の安定した家庭の子達は、長々と実家に居座ることになっている。

こんな現実だと認識するが故に、家族にいくら重篤な問題があろうとも、子どもに家族を捨てろなどと、軽々しく言いたくない。誰の人生デザインにも組み込まれている自立を、「心理的虐待」などのラベリングで、早々と親子分離を推し進めることに不安を感じない人々への疑念が拭えない。自立は古典的で、大きな人間成長のテーマであつて、行政の児童福祉対策などではないのだと思う。

かつて、家族が諸悪の根元だ！家を捨てろという論調が流行った時代があつた。

そして近年のように、少子化や非婚化の話が出てくると、反動で家族は大事、不妊治療を応援して、人口を増やせ等という論調が台頭して

くる。

私はそのどれにも与するつもりがない。家族に追い風が来たからといって、それ程家族第一主義者になりたいとは思わない。

家族は面白いものだと思うが、結婚式の紋切り型スピーチのように、「夫婦というものは・・・家族とは・・・」などと結論に至れるようなものではない。夫婦関係と親子関係という二つの親密性の難題を抱えた、ややこしいものなのだ。

世界に目を向けて家族の有様を見れば、この地球上、同時代でありながら、なんとバラバラである事よ・・・とため息の出そうな国家間、民族間、宗教間の較差である。

そんな中で、たまたま日本で生まれ、今の時代に思春期、青年期を迎えた者が多数、同様な症状を抱えている問題は、どう捉えるのが賢明だろう(たとえば不登校、ひきこもり、うつ、発達障害etc.)。

日本でだけ、あるいは類似の先進国だけで起きている現象など、どう考えても社会的要因故の流行病だ。

たまたまかかったインフルエンザは、速く治すことを考えればいいだけで、インフルエンザとは何かを患者全員が理解する必然などない。多くの人たちは無関心であつてかまわないし、ごく少数の評論家や研究者がいれば十分である。

そういう話を耳にすると、いつも思ひ出すことがある



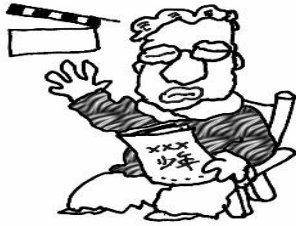
「当たり屋」の少年のことだ



やがて事件は発覚し、
両親は逮捕された



大島渚監督が「少年」というタイ
トルで映画にした実話である



しかし
息子はそこで、
家族を
守ろうとした



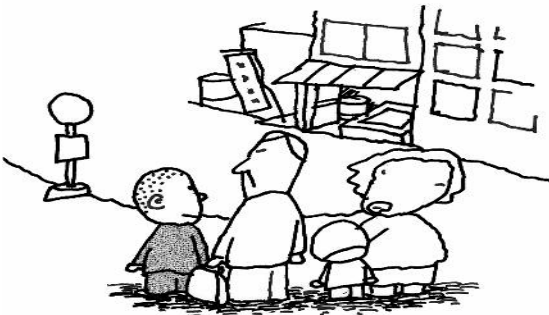
両親と弟がいたのだったか



子どもに
当たり屋を
やらせていた
親である



一家で
放浪しながら
暮らしていた

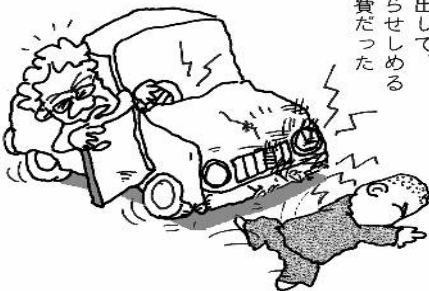


彼に同情し、
ひどい親が
あったものだ
と世間は大いに憤慨し、
やがて忘れた



車の前に飛び出して、
ドライバーからせしめる
示談金が生活費だった

最初は母が、やがて息子も
生活のために、走ってくる
車の前に飛び出すようになった



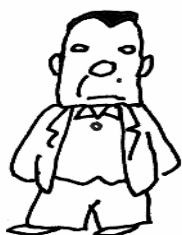


彼らの10年後、
20年後を
知る人は少ない

この言いくさは今も生きていて、
世間はいつも健忘症



当事者だけが忘れることも、
消すこともできない現実を生きる



当たり屋の少年の両親はとんでもない奴だろう。しかしそこで育った子どもがいる。あの少年を、酷い親に強要されて、当たり屋をさせられていた可哀想な子だと語るのは簡単だ。しかしそんなものは語る側の一時の同情気分の発露に過ぎない。なぜ子どもはそんな状況でも、家族や親の味方をしようとするのだろう。これを考えておかないと、結局家族のことなど何も分かっていないことになる。

これについては企業人が内部告発する時の例を考えてみるのが近いのではないかと思う。我々は内部告発者の語ることを自動的に正義だなどと認定しない。組織内不適応を起こし、個人的恨みを抱えた人間が告発的行動に出たりするのはよくあることだ。

だが、内部告発をみなそうであるなどとも考

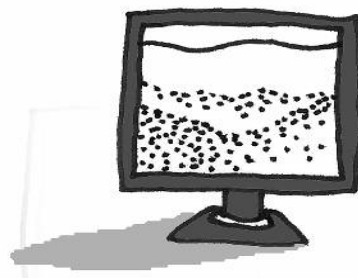
えたりもしない。動機の形成のきっかけがどのようなであろうと、社会にとっての不利益がそこで明らかにされているならば、それを理由に、その内部告発を採る。けっして告発者が正義のための行動を採っている等とだけ考えているのではない。

同じように家族において、組織内構成員である子どもが訴えることを、このスタンスで受けとめるとよい。子どもも大人も家族の一員として、自分の出来ることや使える手段を駆使して生存を確保しようとしている。ならば、外からの判断は結果として、より良い生き残りが、中長期的に達成されるものであればよいことになる。

通りすがりの他人から、「お前の親は酷いことをさせる奴だ」と同情されるたびに、彼は家族への忠誠心に燃えただろう。自分の家族を他者から批判されて平気な子どもは少ない。そこで子どもの中に生まれた世間に対する感情は、長く心の内に沈んで消えないだろう。

「けしからん！」と憤慨した世間は、さっさと忘却してしまう。人の生きていく時間は三年や四年で終了はしない。七十五日で忘却モードに入るのはいつも、世間とニュースショーだけである。

「お前の育った酷い家や、親のことなど忘れろ。そしてこっちのまともな世界に來い！」と善意の他人は強く勧める。だが、そちら側に行った途端、平凡な家に育った子どもと同様の適応を求める。そしてそれが難しいと、「酷い環境で育った子は、そんなことになる」と批判的な解説をする。



不朽の名作「砂の器」が今、
TVドラマ化されて
放映されている

世界のどこでも自分は生きていいんだ！



タイトルバックで
父と子が
山陰海岸を
巡礼する



それを見ながら私にも
思い出す息子との情景はある



そんな風に思えたら、
人は楽になれるのだろうか



子どもが
そう思えるように
なるためには、
親を捨てればいいのか



誰の人生にも悲しい思い出や
苦しい記憶は刻まれているものだ



自分が確保した
幸運はしっかり抱えながら、
まだ弱い他人に
そう言い切る大人が
信用できない



「砂の器」の主人公は、
逃れて逃れて、
結局
逃れきれなかった
ものに破れる



砂の器

2004年、TVドラマ「砂の器」(原作・松本清張)が放映されていた時期に、このマンガは描いた。不朽の名作・映画「砂の器」(1974)ではドラマの根幹に、原作通り主人公の父の病(ハンセン病)が存在する。社会的(法なども含めて)に構築されたこの病への無理解と偏見が、主人公のその後を形作る大きな動機になっていた。しかしその後のドラマ化では、この時も含め、原作の設定そのものに改変が加えられることになった。

「砂の器」の主人公、和賀英了は出自を隠し通すことで、この世界に居場所を見つけようとした。それは自分の生まれ育った家族の消去であった。深い深い心の奥に、父親に対する愛着はあったに違いない。しかしそれを封じ切ることが、この世界で生き延びてゆく彼の戦略だった。

「内と外」の理屈で言えば、捨てられるはずのない内を切り捨てて生きる決心をしたのである。しかし善意の駐在おまわりさん(一時期の育ての親だった)は、懐かしさから不用意に近づくことで、孤独に生きる辛さを乗り越えてきた青年を殺人者にしてしまった。

過去など要らないと思って生きている人間があることに、想像の及ばない善人の鈍感さは、しばしば厳しく生きてきた人の砦を、我知らず崩しにかかる。

彼に家族を捨てさせたのは「これが普通だ!」と認めさせている世間だったろう。他の家族とは違っていても、自分の中には持っていたい家族への忠誠心を捨てることを世間が強要したのである。

子どもが家族を好きなのは、そこが素晴らしいところだからだけではない。困った一家や、あり得ないと思われるような事情の人たちも少なくない。それでもやっぱり家族だと思って生きてゆくのは、諦めや負け惜しみだけではあるまい。

それが何かと問われても、答を知っているわけではないが少なくとも、経験の浅い教育・福祉関係者の語るありきたりの善意もどきの言葉で捉えられるものではない。

まだ日本が貧しかった時代に、道ばたに捨てられ、保護されて施設で育った青年がいた。長じて立派に家庭を持った。そんな彼がある時、児童相談所を訪れた。

「自分の捨てられていた時の記録がここにありますか?」。実親を捜し求めて児童相談所

を訪ねてくる人が、少数だが私の児童相談所在勤中には存在した。

「育ててもらっていない親をなぜ?」とは思わなかったし、彼らが恨みの一つも言ってやりたいと思って探しているとも思わなかった。

とはいうものの、「やっぱり親子は血のつながりやねえ・・・」などと語って納得する通俗性にもうなずけないところがあった。

自分は無事生まれたのだ。そして死なずに今存在しているのだ。その巡り合わせに、産んだ人が何もしていないわけがない。会えるものなら会ってみたい。せめて経過痕跡をたどりたいと思うのは、自分の存在そのものの確認であり、感謝だろう。

アーキヴィスト

しかし一方では、こんな経験もしている。だから一面的に、産みの親家族が大切だなどと言いたいのではない。

人間は家族と呼ばれる多様性を、時代を超えて持ち続けてきた。だからその、どの部分を取り上げて語っても、不十分感拭えない面があるのではないかと思う。

記録と記憶

2014年の初夏、ある関心から関東の児童養護施設を訪問した。これのそもそもは、春に英国のナショナルアーカイヴスを訪問したことと関わっている。私自身、それほど学究的な動機があったわけではないが、巡り合わせの結果として、子どもの記録保管というテーマが、英国でのフィールドワークに含まれていた。そして、同僚の中村正を通して、アーキヴィスト(Archivist・永久保存価値のある情報を、査定、収集、保存、管理し、閲覧できるよう整える専門家)という存在について、少し目を開かれるところがあった。

というのは、私自身の公務員時代の経験から、児童記録、公文書保管、当事者からの開示請求などは、馴染みのないテーマではなかった。だが一方で、保管年限の短さや、行政機関としての自己防衛的な開示対応など、「記録」そのものが中心ではなく、扱う側の社会的諸要因が、事実を加工している面が否定できないと思っていた。

そんな状況で、アーキヴィストという資格職

の存在を知り、日本では唯一、学習院大学にある専門家養成のカリキュラムで学んだ女性が現場で働いていることを知った。

複数力所で働く彼女から、戦後日本社会の児童福祉の大きな課題だった混血孤児の問題とその対応、そして記録と記憶のテーマを知らされた。

当事者Mさんとママちゃま

そんな縁があって、湘南にあるエリザベスサンダースホームを訪問することになった。ここは戦後直ぐ、街に溢れる混血児（浮浪児や遺棄児童）達を助けるために作られた施設だった。ここで初期の卒園生との面談が叶った。

ハーフの風貌をした中年男性が話してくれた昔話は、私の中にあった思い込みを少し変えてくれた。

彼は乳児期に、この施設の前に置き去りにされていた。一般論としては、自分を捨てた母を恨み、それでも生みの母を慕う気持ちは拭えず、子どもは産みの親と育ての親の間で苦しむ。通俗的な社会の認識は、私も含めて、こんな所ではないかと思う。しかし、ここでMさんが語ったのはこんな話だった。

＊

私は母に捨てられたと思っていた。しかし園長は私にこういった。「M、あなたが今元気でここに居るのは、お母さんがあなたをここに置いてってくれたおかげだよ。ここなら大丈夫だと思える場所まで、列車に乗ってやってきたんだよ。そして、おっぱいをお腹いっぱい飲ませて、よく眠ったMを置いて、立ち去ったのだよ。あなたが目覚めて泣き出せば、必ず私達が気づくと信じられるところにね」

こうして園長に育てられ、この人を母だと思って義務教育を終えた。当時の児童養護施設は、中学を卒業すると退所して自活することを求めている。一般家庭ではもう中卒で就労する子は希になっていたが、施設の子にはまだこういう時期が続いた。Mさんは住み込みで就労を始め、施設を離れた。

私のこれまでの経験から想像すると、この段階で子どもは、実の母親を捜すのだろうと思っていた。やはり血のつながりは特別なものだ。しかしMさんは実母を探さなかった。恨んでいたわけではなく、それが自然だった。

初めて数日間の夏期休暇がもらえた時、懐かしくて園長の所に顔を出した。すると「どうしたの？」と聞き、休暇だと知らせると、「何日間？」と聞かれた。答えると直ぐ電話で知り合いに問い合わせ、数日間のアルバイトの口を探し、「明日からここに行きなさい」と言われた。

その時は、「懐かしくて尋ねて行ったのに…」と思ったが、考えてみると、中卒直ぐの身寄りのない自分に蓄えはない。少しでも暮らしの安定に繋がるようにと園長は厳しさを突きつけた。今なら笑って話せますが「厳しい人だった…」と朗らかに語った。

実母

こうして暮らしていた十代後半のMさんにある日、Y市から郵便物が届いた。あけてみると、『貴方の母親が亡くなったが、その整理について希望はあるか？』という問い合わせだった。その時初めて、母がまだ生きていたんだと知った。何となく、ずっと前にもう亡くなっているだろうと思っていた。

役所の窓口に向き、そこで母の遺品から写真を貰った。初めて母の姿を見た。母はY市で生活保護を受けながら一人暮らしを続け、病気で亡くなったのだった。

遺体の確認をと言われて、写真を頼りに見たが、年取ってやつれた母を、元気な頃の写真と比べてみても何とも言えず、係の人と、「面影がありますね…」などと話したという。

私は話を聞きながら驚いていた。そして、人はこんなに強くなれるのだと思っていた。誰かにしっかり愛されて、鍛えられることで、軟弱で傷つきやすいばかりの小市民でいなくても、自分の人生を立派に生きることができる。

去らざるを得なかった人を追いかけたり、恨んだりせずとも、新しい出会いの中から、未来を築いていけるのだ。そのきっかけを作った園長・澤田美喜さんの強い愛情に、感服する思いだった。

そして更に続いた話には仰天した。Mさんは遺体確認の場で、自分より年配の男性から声をかけられる。その人は、「私は君の兄だ」と言ったという。そして彼は当然、Mさんより年上だから、母の面影も、事情もより詳しく知っていた。そこでMさんはそれぞれ父親の異なる二

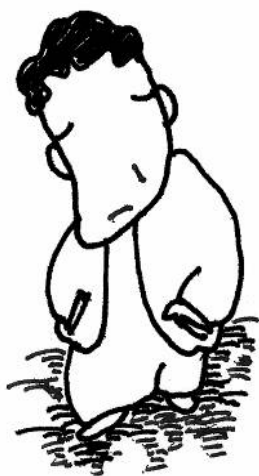
人の兄の存在と、母の物語を聞くことになった。



人は孤独なまま一生を
生きてはゆけないだろう



私は、捨てきれないもの、
捨てさせたくない
もののために
苦労する人を
信じたいと思う



この世界には選べないものがある



選べないから、
豊かにする努力を
するしかないもの

それが家族だったり、
生まれ落ちた場所だったり
するのではないかと思う



孤独

所詮人間は一人だ、という言い方がある。生まれるのも、死ぬのも一人だという。その通りだろう。だから人は誰かと生きたいと思うのだ。

恋愛をしたり、結婚をしたり、家族を作ったりしないで生きる人は、人間を孤独だとは思っていないのかもしれない。いや、あるいは、深い孤独の中から抜け出すことが出来ずに、時を過ごしてしまっているのかもしれない。

歳取ったら一緒に住もうね・・・とかいう独身者のグループのドラマや話を時々耳にする。そのたびに1970年代に流行って瓦解したコミュニオン話を思い出す。

利潤追求型の競争社会の中で、疲れた若者達が、もっと平和に、分かち合った暮らしをと考えてスタートした集団生活(コミュニオン)が世界各地に存在した。

しかしその多くは崩れ去った。理由はひとつ、人間(己も他者も)を知らなかったからだ。

ピースサインを重ね合っていたら、何とかなると思ってしまう単純さが、現実の前に敗北したのである。

所有欲を捨てる、功名心を捨てる、嫉妬心を捨てる、独占欲を捨てる、等のいろんなお題目を、結局自らの手で一つずつ踏みつぶしてしまうことになった。

今日の心のケア論や家族支援の発想に同調している人々の心根が、こういった不用意な自明性を背景にしてはいないかと心配である。いつ、誰が、どこで言っても正しいことなど、正しい以外に力はないかもしれない。

むしろ、私達の家族行動への理解は、多くの「分かっちゃいるけど止められない」事から始まらなければならない。

*

人が天涯孤独に生きられるものだとは思えない。いっそなければ気楽、そう思う人間関係もある。しかし、本当になれば楽なのではない。そこは無である。あるから苦しいが、ない方が楽だと感じられる前提には、あることが横たわっている。

ロビンソンクルーソーは、一人は寂しいが、誰か居たらそれはそれで気詰まりなことだろうなどと言いはしないだろう。

児童虐待対応の議論の中で、「親の言うことを真に受けて、もし子どもに何かあった時、あなたは責任がとれるのか！」は、古い恫喝である。とれるはずなどない。しかしその責任の持てなさは、親子分離した後の、子どもの長い人生に責任など持てないのと同じである。

家族再統合などと、後出しジャンケンのような文言で、納得できるのは無知故である。大昔から、分離させた家族の再会には、多大なエネルギーが求められた。それ故、結果的に多くの子達を、児童施設に措置しっぱなしになる結果に至ってしまったのだ。

起こってしまった事柄に対応する専門家や世論の活性は、いつもこういう空しさを内包してきた。今、更に通報を迅速にと、中央官庁の役人発想だと思われる三桁ナンバー「189」化が動き始めた。

この対策で虐待通報はさらに増えるのだろうか。いや、ひょっとすると、国民はもうこの話題にはぼつぼつ飽和していて、興味がないかもしれない・・・。

それはともかく、通報数が上がればまたその

数字に、ますます・・・という論調も飛び交うのだろう。こんな数を拾い集めてきて、ゆゆしき問題だと語り合うことが仕事になってしまっている。

わが事を差し置いて一般を語るな。我が子にしないことを人に強いるな。自分が分からないからといって、人も分からないに違いないなんて思うな。中流サラリーマン小市民役人の想像できる人間の暮らしなど、人間のごく一部分にすぎない。

求められているのはいつも、予防である。私達の一人ひとりに悪意や犯意があるとは思わないが、専門家のマッチポンプ(自分で起こしため事を、鎮めてやると持ちかけて、利益を得ること)は社会の常なのだということは忘れてはならない。